



昭和43年(1968年)

10月号 (No. 280)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

随筆・紀行

- ウェストン翁の手紙……永原輝雄… 1
 ウェストン氏の歿年月日……………山崎安治… 1
 常さん小伝……………初見一雄… 3
 有りそうで無いもの……………藤島敏男… 8
 神河内山荘に泊る……………松崎中正… 8
 石狩・音更駆け歩き……………浅利欣吉… 8

研究

- 制動確保……………石岡繁雄… 4

海外通信

- カフカズ1968……………塚本圭… 2
 ヒマラヤン・ニュース……………
 ネパールの登山解禁……………5
 インド登山五カ年計画……………5

図書紹介

- 東ヒマラヤの花……………中尾佐助… 6
 足引……………古沢 肇… 6
 タクトラ……………野上成男… 7
 折れたビッケル……………松本熊次郎… 7

会員通信

- ソウルより……………立大山岳部… 7
 アフガニスタン通信……………須田紀子… 7
 アフリカ便り……………矢入憲次… 7
 パリ通信……………大野俊夫… 7
 北海道便り……………相川 修… 7

会務報告

- 九月理事評議員会……………9
 新刊図書寄贈受入……………10
 新入会員……………11
 会員異動……………11

much happiness.
 With kindest regards from Mrs.
 Weston & myself your sincere
 friend
 Walter Weston

ウェストン氏の歿年月日

ウォルター・ウェストン師の歿年月日を調べようと考えていたのは、もう大分以前になる。一九四〇年(昭和十五年)三月下旬死去されたことは、会報九十四号(昭和十五年六月発行)に T. F. 氏(藤島敏男氏)が、「名誉会員 ウェストン氏の訃」と題し「本会の名誉会員ウェストン氏は去る三月下旬英京ロンドンの居宅において永眠された。さきに夫人に先立たれ、嗣子もないので、本会からは英国山岳会に左記の電信を送って遙かに弔意を表した」(電文略)と簡単な記事が出ていたので知っていたが、何日に亡くなられたのかわからない。当の藤島さんにうかがっても不明であった。

ところが「山日記」の一九六四年度版が出たとき、ふと見ると日記欄の三月二十七日のところに「ウェストン昭和十五年(八〇)」と書かれているを発見した。早速当時この編集をやっておられた皆川完一氏に問い合わせると六三年版に三月下旬歿と書いておいたところ、理事会が何かの会合の折松方会長から教えられ、六四年版から三月二十七日歿と記入したとのことであった。

そこで今度は松方さんにかがったのだが、いま一度調べてみよう、とのことそのままになっていた。ところがその後雑誌「山小屋」百号(昭和十五年五月発行)を見ていたら小島鳥氏(「山のウェストン翁」という追憶文を書いている。その末尾に朝日新聞に発表された文章を筆者の許可を得て

ウェストン翁の手紙

永原輝雄

会報第二七五号に、藤島敏男氏が「磯野記念文庫のこと」を書いておられる。その中でウェストン翁の「ジャバニーズ・アルプス」の本のあいだに、磯野計蔵氏の結婚を祝福する手紙が、挟まれていたことが、紹介されているが、その手紙を読むと磯野氏と親交の厚かったことは勿論、本会の会員、横有恒、松方三郎、故石川欣一氏等との交友も見られ、興味深いものがあるので、披露したいと思うが、へたな訳文より原文のままの方が、真意がうか

えるから、左に原文を転載させて頂くことにした。磯野氏の結婚祝に贈られた「ジャバニーズ・アルプス」の本を、最近改めて閲覧すると、ウェストン翁の手紙にある通り、扉に D・W・F の三字が鉛筆で書かれ、この本はかつて D・W・F レッシーフィールドの蔵書であったことが明かされ、また表紙裏には「磯野氏の結婚祝として贈る」というウェストン老の祝詞が張付けられてい

て、由緒ある貴重な書籍であることを物語っている。
 なおこの本のあいだにはこの他に磯野氏の席の名札と共に、「一九三三年のアルバイントラップ年次晩餐会のメモ」が、はさまれていたが、これは磯野氏が滞英当時(ウェストン翁の手紙より二年前)出席された時のもので、その日の式次第の乾杯の順序なども、印刷されていて、豪華な晩餐会が目につく。

それよりもそのメモの裏に、シ

My dear Isono
 57 Iverna Court W. 8
 Feb 12/35

以下は手紙の原文である。

It was so nice & kind of you to send us your greeting at Christmas time & especially to tell us about your approaching married. That great event happened before the news reached England, but you had our warmest good wishes. I was so pleased too, to learn about the nice place you had chosen for your wedding journey. I wonder where you have now settled down in your own home? I had a nice "Christmas Card" from Saburo Matsukata in the shape of a photograph of himself & all his family a very pleasing picture. It is a nice companion to one sent to me several years by Maki San of himself & his wife in wear Japanese dress. If it had been coloured it would have looked very splendid.

We thought of you when we were at the Alpine Club dinner in December - Mr. Clive Davies was my guest again, we sat at the same table as before. But at the opposite end. We had a Japanese guest again next to us, Mr. Ishikawa representative of the "Mainichi" (also of the Japanese Alpine Club) - SO there was a very interesting atmosphere again.

I spent last July again at Inter-laken at the Victoria Hotel and often thought of you. I have still the little photo taken near the English church, it is in my study, with many other things of interest that remind me of my Japanese friend & Japanese travels. I was very glad to be able to get you a copy of my old book on the "Japanese Alps" You will find on the "fly leaf" the letters D.W.F. This means that the book once belonged to the great mountain explorer the late Douglas W. Freshfield was died last year & whose library was sold. Please accept the book as a wedding gift from me with all my best wishes for your married life in which I hope you will enjoy

再録したと付記してある。ということ
は朝日紙上に訃報が出たに違いない。
昭和十五年三月下旬の朝日新聞の
込みを調べれば判明すると思ふはつ
たがおいそれとそのひまがない。

ウェストン師の追悼文は、戦争中の
故でもあらうが「山岳」にも出てお
らず、ランボルト氏がアルバイン・ジャ
ーナル第二六一号に載せた追悼記を吉
阪隆正氏が全訳し会報一〇六号(昭和
十六年六月発行)に載せているだけだ
である。ランボルト氏の記事にも歿年月
日はふれておらずだ(一八六一—
九四〇)となっているだけであつた。
さて問題の朝日新聞のこゝに込みだ
がこれは同社運動部の片山全平氏(會員)
の手をわずらわして調べてもらひよう
やく昭和十五年三月三十日付朝刊に出
ていることをつき止めた。顔写真入り
で、「ウェストン師、我が山嶺界の恩
人」という見出しが付き次のような記
事が載っていた。

〔ロンドン特電二十八日発〕曾て宣教
師として永らく日本に滞在し、日本山
嶺界の恩人として知らるるウォルター
・ウェストン師は二十八日ロンドンに
おいて逝去。

ウェストン氏は一八六一年英国のダ
ービーに生まれケンブリッジ大学卒業
後宣教師として明治二十二年神戸に來
朝、布教のかたわら北アルプス白馬、
立山を踏破し、二十八年帰国「日本ア
ルプスの登山と探検」という著書を著
し以来日本アルプスの命名者として知
られていた。享年八十。

これによってウェストン師の歿年月
日は昭和十五年三月二十八日というこ
とが判明し、私は片山氏からゼロックス
でコピーを取ってもらひ、鬼の首で
も取ったような気持ちで松方さんにお
見せしたのである。ところが松方さん
はふに落ちない顔をしている。朝日に

はたしかロンドン・タイムスのこゝに込
みがあるはずだ。いつか島田さんや
ム氏の死亡記事を社のタイムスのこゝ
に込みから探し出しているのので、タイム
スに一度調べてもらひたい。タイム
スにわたる。そこでまた片山氏に連絡した
ところ、朝日のタイムスの古くもの
は、現在所沢の倉庫に保管されてしま
つて見られないという。しかし全平氏
の友人が朝日のロンドン支局にいるか
ら頼んでみるという返事であつた。ま
た六月、六義園の有志閑談会でまた
ま顔をあわせた島田巽氏にこのこと
をお話すると、島田さんも早速ロンドン
支局に連絡して下さるとのことだ。次
第に話は大きくなって来た。

全平氏からタイムスのウェストン師
のオビチュアリーが手に入つた。私に
連絡のあつたのは七月一日のことであ
つた。一九四〇年三月二十九日付で、
その全文を参考のため載せておきた
い。水曜日とあるのは三月二十七日で
あり松方さんの記憶がまさに正しか
つたのである。(山崎安治)

Obituary

THE REV. WALTER WESTON

MOUNTAINERING IN JAPAN

The Rev. Walter Weston, F.R.
G.S., who died in London on
Wednesday at the age of 78, was
not only the first to make the
fascination of the Japanese Alps
known to the world, but was, as
the Japanese themselves admi-
nistered, the father of mountainer-
ing in Japan. In 1937 the Emperor
conferred on Mr. Weston, who
was formerly a British missionary
in Japan, the Order of the Sacred

Treasure.

Walter Weston was the son of
John Weston of Mile Ash House,
near Derby, and was educated at
Derby School and Clare College,
Cambridge. Later in life he be-
came a Cambridge University

Extension lecturer. In 1889 he
made his way to Japan as British
chaplain at Kobe, a post which
he held until 1895, and the remain-
der of his life was spent partly
in English livings and partly in
Japan. He was connected with
the S.P.G. mission at Yokohama
from 1902-5 and returned there
as British chaplain in 1911. In
1917 he was awarded the Back
grant of the Royal Geographical
Society for his explorations in
the Japanese Alps, and he was
the first honorary member of the
Japanese Alpine Club. He was
also a member of the councils
of the Royal Geographical Socie-
ty, councils of the Royal Geogra-
phical Society and of the Japan
Society, and had published several
books on travel and mountain-
eering in Japan. It was reported
in 1937 that Japanese alpinists,
who number thousands, were
planning to erect a bronze tablet
in his honour in the Japanese
Alps.

Mr. Weston married in 1902
Frances Emily, daughter of Sir
Francis Fox, who shared her
husband's love of mountainering
and was herself one of the most
distinguished women climbers of
her day. Mrs. Weston, who
accompanied her husband on

many of his climbs in Japan, and
made three ascents of Fuji-San,
died in 1937.

カフカズ・一九六八年

塚本 珪 一

日本労働者スポーツ協会派遣隊とし
てのカフカズ登山は第二回目である
が、今回はウシバ峰(四七〇〇メート
ル)を目標とした。
ウシバは南峰と北峰があつてその標
高もいろいろ示されているが現地に入
手した青やきの地図では南峰が四七〇
三メートル、北峰が四六九四メートル
となっている。

スワネチエアの人々はこの峰を八魔
女の住み家と言っているだけであつて
怪奇な岩峰である。特にマゼリー村あ
たりからのウシバは長谷川伝次郎の
ハビマヤの旅で見たカイヤスに共
通した姿だと思つた。

私達はモスクワから三時間飛んでミ
ネラルウォータリーの空港に着き、そ
からバスで約五時間かけてエルブル
イス・キャンプにはいった。このキャン
プから十五分ほど歩けばシケリダの
キャンプがある。このシケリダのキャン
プにはポーランド隊がきていた。私
達の基地にはノルウェー隊がきてい
た。

七月十二日、ソ連人三名と私達八名
はエルブルイス・キャンプを出発、バ
クサン谷からエセンギーの谷にはい
り、河原で一泊する。

次の日、三三七八メートルのバチョ
峠をこえてエズンブリエートの小屋を
へてウシバ氷河下流のブックワラ・ロ
シヤという林でキャンプをする。アタ
ック・メンバー(車・木村・小林・京
極・福岡・中道)はウシバ氷河末端の
大滝上部まで進む。
七月十五日からウシバ南峰西壁及び

岩稜ルートのアタックが開始された。
576級AIのグレードをもつ西壁は
約六〇〇メートル続く。車、木村、小
林、京極の四名は西壁四角ルートの第
二登(第一登は一九五五年)をやり頂
上直下で登る。ハーケン切れのため頂
上は断念して下降にかかると。

七月二十日、小林スリッパして膝蓋
骨を割ってしまったため、京極と共に
残して車、木村は下る。
七月二十二日より、約三十名による
救援隊が活動をはじめ二六日無事二名
を東面氷河末端にまでおろす。スポー
ツマスター、ドクタールをはじめとした
救援隊は実に計画的に行動してくれ
た。

ウシバの山頂は踏まなかつたが、キ
ャンプのスポーツマスターは西壁四角
ルートの第二登を認めてくれた。

ニージーランド・ 一九六六
アルプス登山隊報告書 知果山岳連
盟が派遣し
たN・Zアルプス登山隊の報告書がこ
のたび刊行された。

報告書には、タスマン氷河周辺、フ
ォックス氷河周辺、アスパイリアン周
辺、マウンテン・クック周辺、セフトン
ビバーク周辺の五部に分れて記録が整
理されており、他に付録として、装
備・食糧・医薬品・撮影と記録・会計報
告などが要領よくまとめられており、
これからN・Zへでかけようとする者
にとつては大変に参考になる。

希望者は左記へ申込み一部二百円
(送料十五円)で頒布をうけることが
できる。(Y・M)
(B4版、タイプ印書八十四ページ、
写真九ページ、ルート図多数、昭和
四十三年七月刊、名古屋市中区丸
の内三ノノ二十六、ノースビル
内、愛知県山岳連盟刊)

常さん小伝…X

初見 一雄

強気になって反対を押しければ、少なくともこの上高地での生活は難しなくなる。中尾で暮しをたてるとすると、慣れない畑仕事をやらねばならぬまいし、水利の便が悪いところだから、耕地は限られてくる。高瀬川での漁獲もあるが、新入りでは摩擦も多からう。

踏みとどまって闘うとしても味方の軍勢は一人一匹では、兵糧攻めにも脆く、永く保ちそうもない。具合の悪い不義理もあるから、風は冷たく当たってくる狭いうえに窮屈だ。

そこは根っからの善人である彼にはどうしても踏みきれない。弱気の虫がさいなんで、とつおいつするのだから。

分別もなく養家を飛び出したのは十七歳の若さだったから、世間の思惑も気がねも問題はなかったであろう。説得に屈したのか、神様に手を焼き始めたのか、断固として抵抗を示したくも、二年たりない四十七歳では力も風格もいま一步のところで立往生している。

やがてやまばを避えることになる。人生に山坂多しとしても、女坂の上り下りこそ最大のやまであろう。

そのやまばにたち向かう破目に至ったのである。別れたのである。別れなければならなかったのである。

話はあっさりついたのか、もたついたのか、一切のことはしばらく時がたつてからきいたことなので、大詰の舞台が懸壇場であったか、修羅場であったのか、残念ながら分らずじまいであった。

押しかけられたうえに、振られましたではいくら若年寄でも男はたつまい、その逆であつてよかったし、貫録十分なご当人にとっては名こそ惜しけれである。

結果は常さんの方から身を引いたのである、家を出たのである。

この別れの手段はなかなか見上げたものである。人生の達人さえ遠く及ばざるところといわねばならない。

すべてを去る態度は出来すぎたくらい見事である。ただ住居が借り物であつたことは、これだけは演出上のミスであつて、この幕切れバタリと決まらず、本人にとっては、体裁の悪い引き込みで気の毒にたえないが、これで彼を責めるわけにはいかないのである。

彼の財産は本稿の(二)に書いておいたから内容はお分りのことと思うが、鉄砲と舟を除けてしまつと、めぼしいものは殆ど残らないといつていいのである。たとえ残した財宝といつても一個いくらかという値打ちでなく、看貫のうでで決めましよう、と廃品回収業の方でも辞退しかねない品物であろうから、総べてをあたえてしまつたか、と大いに笑おうが、感心されようが、読んで戴く側におまかせする次第なのである。

一枚一笠にして家を出るのが出家であれば、一竿一蓑の狐師の家出はなんとよぶのであろうか、ともあれ、商売道具である銃と釣竿をかついて立ちのいていったのである。そして上高地からもでいていったのである。

終の栖かときめていたであらうし、三十年一歩も動いていない場所である。追いつてを喰らったわけではないが、自滅してしまつたら身もふたもない。

去りぎわに、飛驒の白川から白山の方へいって、狐の生活を送るといったらしい。しかし事実は金木戸川の双六谷えおちていったのだから、姿をくらまそうとの考えかもしれないし、敵を欺かんと、すねばの計略かもしれない。しかし智謀家にくれたプレーをみせる頭脳ではない常さんのことだ。だれのしこみであつたらう。

はかない夢をむすんだのは三月に足らなかったのである。三十年の不作——養子の口以来この年はちょうど三十年目に当たる——はついに実らずして終わりをつづけたのである。

金木戸に隠れるにしても、この谷に精通していたとは思えない。金木戸に明るい狐師といえは板尾の大倉弁次郎をおいて外にあるまい。彼の手引きがあつてここの暮しになりたつのである。見座から金木戸の部落を経ていつのか、笠谷をのぼって打込谷へ出たのかは別にしたい問題ではないが、奥抜戸の岩小屋を仮りの棲家としたことが正月の中尾の話ではつきりしたのである。

金木戸川の谷筋には恰好な岩小屋が多いと、弁次郎は口頭自慢していたからこゝら辺りであろうと、見当はついていたのである。

それにこの岩屋は弁次郎の兄貴が熊狩りをする時の根拠地で、板囲いも、さしかけも完全でそのうえ食糧も相当量常備してあつたのである。いわゆる狐師の縄張りで、大倉兄弟の勢力範囲がこの双六谷なのである。

白川へ行くのが、金木戸でイワナを釣つていようが、上高地の人達にしてみれば同じ方角の同じ商売だと思えてくるから誰も探索しようなどの気は起こすこともない。岩魚の餌は残されたままに違いないが、追いつけたにしろもたない諦めはすぐついたのである。

哀れをとどめたのは女史である——これは諷刺の意味ではない——その秋の上高地は何かと落ち着かない空気が

つたので早く切り上げてきたから、その行末を見届ける親切心はだしようもなかったのである。

当方は身のほどを知らない軽はずみな性質が多分にあるほうだから、もしか相談でも持ちかけられたら、進退きわまつたに違いない。

見込まれるおそれなきしもあらずで——これは自惚れではない——東京へ連れてゆけども追られたら、嘉門次さんの飼犬のように二時間間島々まで走る速さで逃げださなければならなかつたらう。

高山へ帰るつもりであつたのだから坂巻温泉から平湯の方へ向かつてから消息は絶えている。

金木戸へ行くためには中尾を通るのが道順である。平湯へ抜けてもかまわないが廻り路だし日数も余分だ。中尾を経れば誰かに顔を合せるはずである。しかし誰か常さんの通過を見かけなかつたという。

屋間ならば見知りの一人や二人は畑に出ていよう。上高地とのゆききもあることだし、大も連れていっているのである。

してみると、夜間ひそかに中尾をすぎて、気づかれぬ工夫をしたものとみえる。時刻を逆算すれば上高地を出発したのは夜の更けてからのことになる。

バンドリ——ムササビのこと——を撃ちながらの夜行軍だつたという人もあるが、そんなことよりは、眠りをさまたげないうちに小屋を出る必要が迫つていたのであらうと思ふのである。

住むこと久しい上高地から姿を消すとなると、一抹の感慨はなくもがな。双鹿夢破れ、孤雁飛び去らんとす。霜凍る夜半、蕭然、梓川を渡つたことであらうか。

(未完)

第九回登山技術講習会

指導委員会は恒例の登山技術講習会を左記のとおり実施します。これから冬山を本格的にやつて行くとしてされる初級、中級の方々に対象として日本山岳会らしい交流、親睦を尊重した楽しい講習会にしたいと思ひます。男性、女性を問わずふつて御参加下さい。

▽場所 富士山

▽日程 十一月二十一日—二十四日

・二十一日 夕方東京出発(貸切バス)富士五合目御庭小屋泊

・二十二日 五合目—七合目で基礎訓練

・二十三日 富士登頂、パーティ別練習

・二十四日 練習、反省会、午後五合目出発貸切バスで帰京

▽講師 山崎安治、広谷光一郎、村木潤次郎その他

▽費用 会員五千五百円、非会員六千円

▽参加希望者は本会ルーム指導委員会まで御申込み下さい。申し込み用紙をお送りします。なお参加者は三十名で打ち切ります。

登山講演会の開催

指導委員会および学生部担当で十一月九日(土)午後一時から五時まで池袋西武百貨店ファウテン・ホールで登山講演会を開催します。

三田幸夫氏のリーダー論、桑原武夫氏の登山の文化論の講演の後、学生登山シンポジウムを行います。シンポジウムのメンバーは大塚博美、金坂一郎、浜野吉生、辰沼広吉、平野真

団の三人に加藤泰安、辰沼広吉、平野真の三人が加わり、活発な討論を展開する予定です。入場無料ですが、会場

の人員に制限があるので整理券を出す予定です。

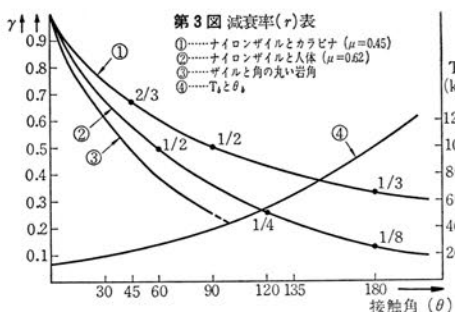
制・動・確・保・②

石岡 繁雄

減衰率の計算

さて第1図で、確保者は、墜落者のザイルの張力 T_1 を約二〇〇キログラムに保ちつつ、 H の半分以上だけザイルを送り出さなくてはならない。そのためにはまず確保者の左手(案内手)とよぶことにする。ザイルの張力 T_1 の大きさが判明しなくてはならない。(このような姿勢での制動確保では、案内手を強く握って制動しようとするとは、ほとんど意味がない。制動は、制動手のみで行なう気持が大切である。)

T_1 は次のようにして計算することが出来る。ザイルは墜落者と確保者の間で、カラビナによって屈曲し、 T_1 は T_2 より小さくなっている。もし T_1/T_2 とし、 T_1 を減衰率とすれば $T_1 = T_2 \cdot r$ となるので、 r_1 が判明すればよい。これは、ザイルがカラビナで屈曲する



角度 θ_1 (接触角という)とザイルとカラビナの間の摩擦係数(M)がわかれば $r = T_1/T_2$ という関係があるので、第3図の曲線①から求めることが出来る。すなわち使用ザイルをナイロンザイルとすれば(麻ザイルのときはほぼ同様に取扱い換えてよい)ナイロンザイルとカラビナの間の摩擦係数は約〇・四五となり(「岳人」九八号に記されたウィリアム・シリ氏のデータ)①の曲線を用いる。従って第1図の場合、 θ_1 はほぼ一八〇度であるので r_1 は約 $1/8$ となり、 T_1 は W で約七〇キログラムとなる。

第1図の場合には、墜落者と確保者の間でザイルは一個所しか屈曲していないが、一般にはザイルはカラビナ、角の鋭くない岩角(角が鋭くしかも接触角が九〇度に近ければ墜落のときザイルはその岩角で切断する危険がある)樹木などで屈曲する。

その場合には、それらの点での減衰率を $r_1, r_2, \dots$ とし、 $r = r_1 \times r_2 \times \dots$ (r を中間減衰率とする)とすれば $T_1 = T_2 \cdot r$ となるので、 T_1 を知るためには中間減衰率 r を計算しなくてはならない。

ザイルが岩角にかかったときの減衰率は、岩角の状況によって大いに変わる。ところが後述の実験の場合のように、岩角をハンマーでたたいて丸くした場合に、第3図の③に近い曲線になると思われる。なお θ が九〇度を越すことは上述したようにザイルに切断の危険が発生する。

T_1 を約二〇〇キログラムに保つための調節

さて、墜落者のザイル張力 T_1 を約二〇〇キログラムに保つためには、確保者の案内手側のザイルの張力 T_2 を、上記の計算による値に保たなくてはならないが、そのための調節は、確保者の案内手側のザイルと、制動手側のザイル

がなす角 θ_2 (以下ビレー・アングルとよぶ)と、制動手の握力にもとづく制動力 F (以下グリップ・ブレーキとよぶ)とで行なう。

しかし原則としてはグリップ・ブレーキの調節範囲は比較的小さいので、大きな調節はビレー・アングルで行なわねばならない。具体的には次の二つの方法がある。

ビレー・アングル θ_2 をおおむね一定値としておいて(たとえばおよそ一八〇度とか二〇度とか)調節はグリップ・ブレーキで行なう方法と、グリップ・ブレーキを一定値としておいて、調節はビレー・アングル θ_2 で行なう方法とである。

グリップ・ブレーキの調節

グリップ・ブレーキ T_2 は、制動手の握力 F 下キログラムとザイルと手袋との摩擦係数 μ との積 $r = \mu F$ で表わされる。山岳四八年に記された金坂氏のデータによれば、手袋を革手としかつ力いむぐらいという場合、 T_2 は一五キログラムくらいの人とか手袋がぬれていれば T_2 は大きくなる。

握力 F を調節するには制動手のこぶしを腰にくっつけて行なう。どれくらいになるかということ、練習で覚えていなくてはならない。また T_2 を一五キログラムより増すには、腰にくっつけたこぶしを少々外側に回すようにする。 T_2 の調節を必要としないときには第1図のように、こぶしを腰から離してもよい。

ビレー・アングル θ_2 の求め方

グリップ・ブレーキ T_2 を一五キログラムに定めれば、確保者の腰のまわりでの減衰率 r_2 は $r_2 = T_1/T_2$ から明らかとなる。従ってビレー・アングル θ_2 は第3図の曲線②から求めることが出来る。あるいは曲線④から求めることも出来る。

第1図の場合 T_1 は七〇キログラムであるので $r_1 = T_1/T_2 = 0.45$ となり、曲線②から θ_2 は約一四〇度となる。または曲線④からもえられる。

ビレー・アングル θ_2 の調節は、第1図のように、確保者の左手と右手の開きを調節してもよく、制動手の首首を腰にくっつけた場合には、その位置を移動させてもよい。また T_2 が一五キログラム以下では、制動は制動手のブレーキだけでよく、 T_2 が三〇キログラムでも両手の制動だけでよいことになる。

その他注意すべき点

① トップが墜落したとき、ザイルの張力がそのまま確保者に伝わる場合がある。これは中間減衰率 r_1 が1の場合である。これに反し、ザイルがトップと確保者の間で、いくつかのカラビナなどのため屈曲し、そのため r_1 がきわめて小さくトップが墜落しても確保者にほとんど力が作用しない場合がある。(確保者の場合、トップの墜落のショックが伝わることなくザイルが切断することがあるが、これは中間減衰率 r_1 がきわめて小さい場合か、それとも墜落のとき、ザイルが鋭い岩角にひっかかったかといずれかと考えてよい。)

これらはいずれも危険である。 r_1 が1に近い場合、確保者が巧みに制動確保しても、確保者には体重の三倍の荷重がかかるが、この力は確保者には大きな負担となる。また r_1 がきわめて小さい場合には、わずかな制動力でザイルが静止し、制動確保にならなくなるので、そのときにはザイルはおそらく墜落者に至近の支点で切れるかそのハークンぬがけることになる。私のカンでは r_1 は $1/10$ (T_1 は一〇〇キログラム)から $1/15$ (T_1 は一三〇キログラム)くらいが適当と思われる。

従って r_1 または T_1 を計算し上記の範囲から

围からはみ出しているときには、 r_1 または T_1 が大きすぎればたとえハークン打ってザイルに屈曲を与えようとか、または想定例第8図のように鋭くない岩角を利用する。これに反し r_1 が小さすぎる場合には、ザイルをカラビナからはずしてやる。(登攀中ザイルの摩擦がトップの前進をさまたげないような場合でも安心は出来ない。たとえ第1図で、トップの登攀中、接触角 θ_1 は θ_1 に近く従ってザイルはきわめてスラムズに送り出されるが、トップ墜落と同時に θ_1 は一八〇度に近くなり、ザイルの摩擦は大きくなる。)

② 確保者はトップと協力して、トップの移動とともにビレー・アングルと、グリップ・ブレーキとをあらかじめ正しい状態に保てなくてはならない。つまり確保者のザイル張力が三Wに保つようするための調節は、トップがスリップする前に行なっておくのであって、トップのスリップが発生してから行なうのではない。たとえばビレー・アングルの調節を、トップの墜落状態を見ながら行なうということは、予め中間減衰率の計算が出来ていて、しかもこの技術に十分熟達した上でなければ無理と思われる。

③ 確保者は墜落者を止めようとあせってはならない。計算がおおむね正しければ必ず停止する。また斜面の傾斜が垂直でない場合でも、水平トラバースの場合でも上記のままでよい。

卒会の年次懇談会

本年度の卒会年次懇談会は十月六日(日)正午から水川町三河屋旅館で行なわれた。

正午記念撮影後、田部重治名誉会員と深田副会長の講演があった。

(続く)

ヒマラヤン・ニュース

ネパールの登山解禁

KATMANDU (Kyodo-Reuters)
—The Nepal Government announced Monday it had lifted its three-year-old ban on climbing expeditions in the kingdom's Himalayan peaks with immediate effect.

The ban was imposed in 1965, officially because of communications difficulties in the remote mountains. But it followed several mountaineering incidents that embarrassed Nepal in its relations with neighboring China.

The lifting of the ban, announced by the foreign ministry, means foreign expeditions will be allowed to climb 38 of the world's most difficult peaks including Everest, Annapurna, Dhaulagiri and Makalu.

Rules under which renewed climbing will be allowed have not yet been worked out, but the ministry said they would include a requirement that all expeditions must get sponsorship from their governments and responsible alpine clubs or geographical societies.

The Government does not expect any foreign climbing teams until early next year because of the time required to complete formalities and organize expeditions.

Three peaks officially held sacred remain closed. The peaks, Kanchenjunga, Gaurishankar and

Machapuchare, were omitted from the list.

The Nepal Government was also understood to be anxious lest foreign expeditions encounter parties of Tibetan Khamba tribesmen, who have been fighting against Chinese rule over their country.

Some expeditions climbed peaks not on their permits, or crossed the Chinese border to tackle peaks from their northern slopes.

The list of peaks which foreigners may climb includes only two astride the Sino-Nepalese border, Everest and nearby Lhoste.

The Japanese Alpine Club was expected to renew its request for permission to attempt Everest, and to bring a large expedition next year.

An international group led by a Briton, Lt. Col. James Roberts, has applied for permission to attempt Everest's south flank in the spring of 1970.

Another international expedition led by a Swede, Anders Bolinder, with Col. Roberts as deputy leader, has applied to climb Dhaulagiri for the autumn of next year.

With British Embassy backing, this should receive permission.

Several months ago the German Alpine Club was officially informed it could proceed with its preparations for a series of expeditions next spring, including one to Annapurna.

No permit will, however, be issued to a British expedition

under the leadership of Denis Grey to the border peak of Gaurishankar.

Also still blocked is an application by a Japanese academic alpine club in Kyoto to attempt Kanchenjunga's west peak.

Groups which applied before the Nepalese Government imposed its ban three years ago will have to reapply and to conform to new rules which the foreign ministry will announce within the next few weeks, according to the spokesman. (8, 19)

印度登山五年計画

NEW DELHI (AP)—India has drawn up a five-year plan for mountaineering in the high Himalays.

The semi-official Indian Mountaineering Foundation (IMF) will be the coordinating agency to encourage high altitude adventure among the youth of the country.

The foundation will also sponsor joint expeditions with nationals of other countries. A recent notable example was the all women's team of four Japanese and six Indian girls who climbed 18,566-foot high Kailash peak in May this year.

India's interest in mountaineering increased with the communist Chinese buildup across the Himalayas in the late 1950s. It received added impetus with the reverses suffered by the Indian Army during the 1962 clash with the Chinese in northeast India. Prime Minister Indira Gandhi

said in a recent public address: The Himalayas have been guarding us through the ages. The time has come for us now to guard them.

The five-year plan envisages an average 15 mountaineering expeditions every year. This will include two major treks to peaks above eight thousand meters (26,240 feet), popularly known as the eight-thousanders.

The foundation will contribute liberally for conducting special adventure courses in high altitudes for boys and girls. It will award 20 scholarships a year to deserving students in the mountaineering institute at Darjeeling.

Tenzing Norray, who with Sir Edmund Hillary of New Zealand was the first to conquer Mount Everest in 1953, is a director of the Darjeeling Institute. (7, 24)

「この一本展」のお願い

恒例の年次晩餐会にあわせて行なう「この一本展」も今年で七回目になります。今年は第一回と同じ形での要領により催すことになりました。このたびは、よろしく協力くださるようお願い申し上げます。

一、山に関する蔵書の中から珍本、稀本、署名本何でもこの一本と思われものを一冊持ち寄る。
二、「この一本」は年次晩餐会前日会場に持参し、一般展覧の上、会後持ち帰る。
三、持参する「この一本」に関する随筆一篇(四百字原稿用紙一枚)を添える。

四、原稿には題名と筆者名を記す。
五、原稿は書名、著者名、発行所名とともに十一月二十日までに日本山岳会図書委員会宛送付のこと。

六、晩餐会の当日、出品目録と五項の原稿を取りまとめ印刷し、参会者全員へ配布する予定。以上
今年も晩餐会を有意義にするため、ご協力下さるよう、重ねてお願い致します。

図書委員会
なお年次晩餐会は十二月六日(金)午後五時から平河町松屋サロンで行なわれる予定です。

山岳図書交換即売会のお知らせ
先号でお知らせしたとおり図書委員会は十月二十六日(土)午後三時から七時まで本会ルームで山岳図書交換即売会を行ないます。

同一品に対し希望者多数の場合は午後五時より切りで抽せんを行ないます。(雑誌、重複本を除く)

なお、当日は本会エグゼクティブ委員会(ベナスル当時の)所蔵のベナスル写真(ハシ切、額縁入り、ペキウスエスキソウ添付、横有恒氏署名入り、二十部限り)を頒布します。頒布価格二〇〇円。

第十一回もみじ会お知らせ

恒例の静岡支部担当現地小集会(第二十四回小集会)第十一回もみじ会は十一月九、十の両日富士山山麓十里部で行ないます。宿舎は愛鷹荘と十里里荘に分宿しますが、会場が手狭なためこの日は三十三名に限定することになりました。

費用は三千元、参加申し込み金として二千元(これは費用に充当します)追加申し込みは宿舎の都合で不可能なので、参加御希望の方は至急東京のルームまで申し込み下さい。詳細は申し込まれた方に直接御連絡します。

図書紹介

H. Hara:

The Flora of Eastern

Himalaya

University of Tokyo 1966

東京大学理学部の原寛博士を中心としたグループは一九六〇年以来組織的にヒマラヤの植物研究に着手した。その採集旅行はすでに五回にわたっているが、地域はシッキム南部、東ネパール、カトマンズ周辺、およびブータンである。その間の成果は多数すでに専門雑誌に発表されており、また図書としては「シッキム・ヒマラヤの植物」・「東部ヒマラヤの植物写真集」(会報山・二七七号参照)の二冊の写真を主とした美しい本も出版されている。

ここに紹介するのは一九六〇—六四年にわたる四回分のヒマラヤ採集の成果の公式学術報告である。記事は全文英語で書かれB5版、七四四ページの大部である。内容は巻頭の写真類四〇図版、金井弘夫氏の植物地理学的考察につづき、多数の研究者協力による採集植物のうち、高等植物羊歯類、蘇苔類、地衣類、菌類の学名のリストが五八八ページにわたって記載されており、多数の新種の記載とノートを含むこの部分が本書の主体となっている。それにつづいて原寛氏のヒマラヤと日本に共通する植物の考察と、ヒマラヤと産植物の染色体研究の報告など盛らされている。いわゆるエクベディション・レポート類としては、国際的にも一級品の学術書となっている。

本書でいう東ヒマラヤとは、カトマンズ周辺の若干の採集を除いてはカンチエンジュンガ山群付近のシッキム南面と東ネパール地域のことである。そのつものりになってこの本に収録されている植物名を眺めると、いろいろ思いつくことがある。まず針葉樹であるトウヤクハネウ(Pinus critchthii)・ヒマラヤヒマヤナ(Picea himalayana)・ヒマラヤの東西にわたって非常に普遍的な二つの針葉樹がカンチ山群にはほとんどないらしい。このことはこの山群が植物分布上かなり特異な地域であることを示すものではないなかでと考えたくなる。ヒマラヤ中腹に東西に細長く連なった日華系系の植物分布地域で、カンチ山群は一つの節になっていると考えてもよいだろう。もう一つのこのような節を求めると、クマオン・ヒマラヤ地域と見てはどうだろうか。しかしまあ、この議論はこれ以上はあまり面倒な話になるので、ここでは省略しておこう。針葉樹でカラマツはカンチ山群に明らかに存在しているのに、この本には出ていない。これは採集パターンの行動が地域的に限られていたたにおこったことだ。このような例はほかにもあり、例えばヒマラヤで見事に発達しているエーデルワイス類(Leontopodium spp.)が一つも記載されていないし、また種類相の豊富な採集成果のあるサクラソウ類ではシッキムの名を負うPrimula sikkimensisがななくシャクナゲ類では高山帯の最後あたりに出現してRhododendron nivale, R. lowndesi などのように、このカンチ山群にはつきりあるものが見えない。一般に高山帯の植物は採集がすくないが、温帯部は非常に豊富な採集が行なわれたことがリストにまざまざと出ていと言えよう。これは採集隊が七—八月のモンスーン期に高山帯で採集していないことが如実に反影しているといえよう。

以上を要約すると、この本はカンチ山群のフローラのリストとしては、目

ぼしいものがたくさん脱落しているが、日本の植物相との共通性の関係で、一番重要な温帯部分の採集成果と、その面目がかかっているといえよう。またその目的がそのヒマラヤ植物研究のねらだったと私は聞いていることでもある。

日本とヒマラヤ植物の近親性は本書にいたって、極めて具体的に多数の例をもって研究されている。それは巻頭の金井氏の論文でも、巻末の原氏の論文でも、またリストの中の短文にも随時言及されており、いままでも個々の植物種で説明された事例が集約して解説されている。この部分を読めば、何故ヒマラヤの植物の研究が、日本の植物の研究に欠くべからざる必要性があるかがよく判らるだろう。またそのためには、さらにさらに、日本人はヒマラヤで植物研究をすすめていかねばならないことになる。このような問題に興味を持った人々、本書は今までに類例のない、またまった資料を提供してくれるものである。

本書は東京大学の出版で非売品であるので普通の人々が購入することは困難である。大学直接の出版物は今のところ非売品であることが多く、まるで秘密出版といってもよい状態である。は、何とか改善されなければならぬ。私は長い駄文でこの貴重本を紹介したが、それは買うことができない本だということだけが、この本の持つ欠点だといっておこう。(中尾佑助)

足引

国学院大学体育会山岳部
国学院大学山岳部OB会
去る三十六年に創刊された機関誌「足引」がその後着実に伸びてゆくのがよるこばしい。三十八年に第二号、四十年には第三号が刊行され、号を重ねるにつれ内容も充実している。

内容を簡単に紹介すると、前の第三号では編者の方針で「岩登りだけの記録は省かれ、単独行の記録が三篇報告された注目されたが、この号では岩登りのエッセンスのような好記録、夏の横尾生活から(屏風岩東後ほか二篇)、剣岳合宿から(池ノ谷東大谷ほか二篇)などがあつて十分に読みこたえがする。

また同じく三号に報告された「越後の山旅」、「北海道羅臼岳偵察」は二年の間にその辛苦がみごとに実のつて、今号で「越後駒ヶ岳より尾瀬原縦走」(四十一一年末—四十二年正月)、「知床半島縦走記録」(四十二年三月—四月)となつて報告されている。前号でも述べられていたように、これらの山行はすべて将来の大きな飛躍へのアプローチとも見られるのであつて、今後どんな「山」を選ぶか、その成果に期待が寄せられるゆえんである。

右のほかに「山内と門田のビッケル」(平柳一郎)というすぐれた長文の研究があり、文学としてはシュミット兄弟の「マッターホルンの北壁」初登攀の記録の翻訳(訳者小沢千代子)がある。

以上ごくかいつまんで一部を紹介したが、巻末には現役、OBの座談会記録「新しい山岳部のために」があつて、傾聴すべき多くの問題点が提起されているし、さらに三十八年九月から四十二年十月まで四年間の詳細な年報がつけられている。年報の記事の中にも重要なものが少なくない。ここで蛇足ではあるが年報によつて得た筆者の感想を少し書き加えておきたい。

年報によると四年間の部の山行総数は一九六六年。参加人員、三二一人、延べ九〇九日、年間平均三三八人、二〇二日である。(これは筆者の計算であるから誤りがあるかも知れない。概数とみていたでよい。)とにかく

これは大へんな数字ではないかと思うのである。なぜなら小人数の部、二三年前から十四、五人という線で固定して「きたという伸び悩みの部」としては現役もOBも含めてせい一杯の活動をしてきたにちがいないからである。十四、五人を分母として考えたとき、この動員力には誰しも恐れをなすにちがいない。

編者は編集後記の中で「ながれとひろがり」をテーマにこの号を編集した、と書いているが「ひろがり」の方はともあれ、「ながれ」の方は以上の数字からも推察し得られるごとくに、はげしい一箇なものをもっているようである。良い意味での一箇さをこれらも部の伝統としてもつづけていたできたというのが誰しも願ひである。(古沢肇)

昭和四十三年三月三十日発行、非売品、A5版三三四頁、写真二七七図版多数編集責任者高村潤

THAKTO 6号

大阪府立大学山岳部・同山岳会

「THAKTO タクト」とは、チベット語で大型のシャクナゲの類を意味しており、あこがれのチベットの呼名をとったという。

内容は「国内山行」「論評、随筆、研究」「台湾遠征」などにわかれて

まず巻頭の会長の言葉を要約すると「過去二回のヒマラヤにおいて府大山岳部はかがやいた成果をあげた。その反面府大山岳部会員の西脇君の遭難事故は不可抗力であったが、一般登山者の遭難事故の大部分は不可抗力のものではない。これらの出来事は多くは登山に必要な最小限度の心得もない人々が出かけることから起きている。そして、わが山岳部員の堂々たる歩みに

くらべてまことに心もなない初心者に呼びかけるよい方法がないものだろう。かゝる以上の言葉を読んで、自画自賛なのか、自信の強い人々なのか、おどろいた。

次に「府大山岳部の方角として」と題して、府大山岳部の特徴は「これは一面において危険な要素をもつかも知れないが、江戸の仇は長崎で討つ」といった良い意味での復讐の精神が潜在しているように思う、つまり山行で苦汁を飲まされた場合は必ず、のちにその原因を分析し、何かの形で返しするという精神である。何事にも限らずこの種の負けん気は必要であると思う」といっているが、根性のある元気のいいのもよいが、府大は遭難が多いことに一考を要すべきではないか、部報の中で一會員が書いていのように「私の入部以来二冊のTHKTOが発行された、二冊共追悼号である。今号はそれでないことを喜びつつ」と表明しているように。そして部員の絶対数の減少、部の運営、上級生同志のなれあいなど部報から推察し総合してみると、自画自賛もどうかと思う。

論評では「若手OB・四年生・現役・新人」については、それぞれの立場における関係や、部の運営などについてうまく表現して、多数の大学山岳部にもあてはまる問題点をうまくついたと思う。国内山行記録は、北アルプスの岩場を主体とした記録で、大学山岳部の岩登りとしてはかなり強力で、困難な上級ルートが多く、貴重な登攀記録が多々ある。随筆・研究では「無い袖は振れぬ」という遭難における責任を果たす能力についていろいろいっているが、文章が論理的にも変な所もあり、禪問答らしきものを聞いているように何をいっているのか何回か読み返してみたが、私にはよくわからない。

最後に台湾遠征報告が奥付の後に附録のようにして掲載されているが（これだけで別冊も出ている）文章もよく洗練され、主要な事項もよく書かれているし、登山内容も現実をうまくエンジョイして、部員と山と台湾の人々との関係は読んでもいても楽しく、やはり大阪人らしいものにじみ出ている。

昭和四十二年十月二十日発行写真八頁、図表多数百五十六頁、他別刷三十四頁、大阪府立大学山岳部、同山岳部発行。

折れたピッケル
山岳巡礼クラブ

「折れたピッケル」という暗示的な表題で故斎藤清太郎氏、養口治信氏の追悼誌が事故後二年目に刊行された。もとより純粋な追悼誌であって、高橋定昌氏ははじめ山岳巡礼倶楽部の人々の並々なぬ努力の結晶である。故人の長い山歴と山を愛する高潔な人柄を讀める追悼文の数々はいずれも心を打つものばかりであるが、一方、冷静に事故の原因を追究している点が多ことに直剣であるとともに、資料としても貴重であり、かつまたわれわれ岳人に警鐘を打ち鳴らし、深い反省を促がずにはおかない。

心ある人々は、二人のベテランが、昭和四十一年五月四日、ゴールデンウィークのさ中に、一見不用意に滑落死し、非難めいた報道文が、当時の紙上に掲載されたことを記憶していることと思う。両氏の事故がいかにして起こったか、目撃者のない現場で、折れたピッケルと、はずれたアイゼンが語らんとして何も語っていない。従って事故の探究も容易に結論の出るものではない。

巻頭に収められた写真の一つにある

会員通信

ソウルより

立大山岳部韓国登山隊
東京を出発してから二十日あまりたち、われわれ立教大学山岳部一同十名は全ての登山活動を終え、いまソウルに滞在しております。こちらでは東国大学山岳部とジョイントを結び、予定通り計画を終えることができました。韓国の山岳部は予想以上に活発な活動をしております。われわれは学生ばかりの若い隊ですの、各大学と交流を深めております。立大からのこれまでの遠征隊のライドを上映したところ、五十名もの人たちが集まって大変人気でした。（八月六日）

アフガニスタン通信

須田紀子

インドからアフガニスタンに飛んできてまいりました。ことしもヒンズークシュにはたくさん日本隊が入ったようでした。カブールで偶然岡本竜行、渡辺節子、芦谷洋子さんにお会いしました。昨日岡本、芦谷さんとササニ朝ベ

ルシャのバミヤン大仏遺蹟を見にまいりました。乾いた大地と山々が魅力的です。私はこれからチトラルに行くつもりです。（八月十七日）

アフリカ便り

矢入憲次

出発前はお世話になりました。アフリカへ来てもう一カ月になります。ケニアでは、ナイロビのほか、北方のナイバツヤ湖周辺の Naivasha の調査方々、自然公園を車で走り廻って楽しみました。ケニア山も見に行きましたが、あいの曇り空で残念でした。その後、タンザニアのダレサラムに飛び、北西方一千キロほどにある、ウイリヤムソン・ダイヤモンド鉱山を見学しました。来週はダレサラム西方のドマおよびキゴマ方面に向かいます。（八月十八日）（吉沢宛）

パリ通信

大野俊夫

大変ごぶさたしています皆さんお元気でしょうか。私のパリ生活もすでに四年を過ぎ、そろそろ帰国の時期なのですが、領事などという仕事はなかなか後任難でもたつていないようです。今夏はスイスに出かけて、イタリア国境の Aoste に Val de Banch から降りてみました。最近はおっぱ下り専門というなかなかいい状況はづかしく思います。

九月に入りましたら一週間ほどインタラークンにまいります。家族が向かって家を借りているので、そこへ行ってアイガーでも眺めながら気の向いたところを少しあるいてくる予定です。パリはご承知の五月の大ストライキ

のあとを受けて、十月にまた学生の騒ぎが予想されています。ソ連のチェコ侵入でこのところヨーロッパの風雲急なるものを感じます。會員のみなさんよろしく。会費同封しましたので納入のお手配をお願いいたします。（八月二十八日、織内信彦宛）

北海道便り

相川修

六月二十五日、快晴温暖。折から深田久弥氏が石狩岳、芦別岳、その他への遠征登山からの帰途にサッポロに立寄られたのを利用して、會員有志が集まる。昨年も新緑の頃にピル会を催して盛会であったが今回はやや小人数で十八名、ジョッキの満を引いて談論風発、さすがの深田先生も石狩岳中腹の御殿の飯宿の一掬より超越せんとする趣あり。時に北海道支部発足の是非についての発言としてこれは藤井運平氏からの推進があったのです。出席者総意により可及的速やかに発足させるように取り計らうことに一決する。今後道内在住の會員皆さんの同意を得て先輩諸支部の驥尾に付し諸兄諸姉の御来道の折ご連絡下されば、何彼と助力致したき所存です。ちようどその折、會員坂本直行氏のヒマラヤ画展が開催されており、彼の山岳への情熱の結集に心清まる。

訃報

百瀬道文氏 會員番号三九三〇番、昭和二十六年八月入会。昭和四十三年三月十五日死去。
田村俊雄氏 會員番号六四二二番、昭和四十三年二月入会。昭和四十三年九月一日、札幌医大ヒンズークシュ遠征に参加中、パンレスで死去。本会はここに謹んで哀悼の意を表します。

神河内山荘に泊まる

松崎 中正

五月下旬に新緑の上高地周辺で四日間を過ごしたとき、神河内山荘に二泊した。私は神河内山荘はじめてであったが、この時季の上高地はまだ訪れる人も至って少なく、奥まったところにある山荘での二晩は実に静かであった。

五月のはじめから入っているという管理人の平林老夫は久しぶりの訪問者である私を心から歓迎してくれた。それもそのはずで、出された宿帳には今年の分として五人ばかりの宿泊人の署名しかなかったのだから。

ニリンソウ、アイコ、コゴミなどの

山菜に舌つづみを打ち、うす暗いランプの下でたつたに入って耳を傾けた平林老夫の話は、それからそれへと果てしなく、いつの間にか十二時を過ぎてしまふ、明日の山歩きに差しつかえてはとしぶる寝床にもぐり込むと言った接配であった。

平林次男は明治二十六年生れだそうだが今年七十五歳、昭和二十年十月の水害で島々宿の家を流されてからは、おかみさんの実家の波田に住み、最近では山荘の管理を引き受けて夏の間だけここにいるのである。交通事故で片足を痛め、びっこをひいているが、今では数少ない信州側の往時のガイドとして大町の大和由松などとともに貴重な存在であろう。

老の語る茨木猪之吉、清棲幸保、田中薫、今村孝郎、坂口浩平、田淵行男、山菜に舌つづみを打ち、うす暗いランプの下でたつたに入って耳を傾けた平林老夫の話は、それからそれへと果てしなく、いつの間にか十二時を過ぎてしまふ、明日の山歩きに差しつかえてはとしぶる寝床にもぐり込むと言った接配であった。

清棲氏の北アルプスの鳥の研究にも貢献するところ多く、上高地でのエゾムシクイや乗鞍岳でのキクイタダキの鳥の発見は日本では老が最初なのだと言っていた。上条孫人と二人で清棲氏にお供して、島々谷の支流の矢嵩沢の岩場でザイルを使い、イヌワシの巣の調査をしたときの話には迫力があつた。それにしても清棲氏は著書の中でほとんど平林老にはふれていないのはどうしたわけであろうか。これが登山の世界ならば当然 Hout と同等に重んじられることであろう。

次いで設備の貧弱な点。ここには電気も水道もない。上高地の宿で電気がつかないというのは（私個人としてはつかないのに賛成なのだが）もう一般には受けないのかもしれない。ウェストン祭「老のおかみさんは『うす』とさん」と発音して面白かった。集まる人達でも偉い人はみんな西糸屋や五千尺へ行ってしまうのだそう。

自分たちの会専用の小さな小屋

今年の六月下旬、国際文化振興会の K 氏から電話で「ローマの木内さんから、イタリア山岳会ローマ支部で、日本の山について話をしたいと頼まれた。ついては日本の山岳のカラースライドを三、四十枚送ってほしい。この件については、藤島に相談すればよいと申越した。何分よろしく」と連絡があった。

木内君は僕の同級生、元は外交官、今次大戦末期イタリアで、日高信六郎大使、木内良胤参事官というコンビで苦勞したひと、JAC 会員にはならなかったが、若いときから山登りもスキームや、ジュネーヴに勤務時、かのランペールと親しく、さかんに登ったり滑ったりしたことは、僕が「山岳」六十一号「困那山の話」の中に（一〇四頁）書いた。現在は在ローマ、日本文化会館の館長をしている。

たのまれたことは僕の手では、どうにもならないので、日本山岳会を煩わすことにした。ところがこれがなかなか

からチがあかない。日本の山を海外へ紹介する、カラースライドなど、いろいろのは、これほど登山人口が増え、山中カメラを持たぬ登山者は、さすがの骨が折れるような世帯なのに、どこにもないというのである。

まあなく届くだろうと、ローマで心待ちしている木内君のことをおもって、僕は気がでない。とどのつまり

有リそうで無いもの

有リそうで無いもの

藤島 敏男

「山と溪谷社」に当たってみて、はというアドヴァイスをもらって、旧知の川崎吉蔵君に連絡した。「アルバイ」・カレンダーに採用した、カラー・フィルムは、大体保存してあるが、サイズが 6×6 が多く、三十三ミリに複写の必要がある。その費用だ、負担して写ればよい」と大変好意のある回答を得たので、ある日僕は同君を訪ね、最近三四年分のアルバイ

ものが、案外すくないということだ。海外で紹介するに、雪の少ない季節の写真も必要である。一年中雪におおわれている山は、日本ではむしろ少ないのだから。

このたびの経験からフット思ひ浮べたことだが、日本の山岳を外国人に紹介する、カラー・スライド何十枚かのセットを、日本山岳会に備品としてもつべきではないか。外国から来日した登

員外九百円の神河内山荘はシーズン中でも決して賑わっているとはいえないようだ。

泊り客の少ない原因はまず P.R の行きとどいていないことにある。二十七年以降の山日記の山小屋一覽に出てくるほかは、どのガイドブックにもほとんど神河内山荘のことはかいてないのだから。

次に設備の貧弱な点。ここには電気も水道もない。上高地の宿で電気がつかないというのは（私個人としてはつかないのに賛成なのだが）もう一般には受けないのかもしれない。ウェストン祭「老のおかみさんは『うす』とさん」と発音して面白かった。集まる人達でも偉い人はみんな西糸屋や五千尺へ行ってしまうのだそう。

（一九六八年八月記）

石狩・音更駆け歩き

浅利 欣吉

大正十二年、大島亮吉のたどった北海道中央の石狩川源頭、石狩岳（一九六二メートル）、音更山（一六三二メートル）を訪ねて来道する深田久弥副会長を出迎えるため、氏家民雄（JAC）浅利欣吉（北海道新聞）平野明（北海道放送）、高沢光雄（五右衛門）の四名は、六月二十日午後五時、二台の車に分乗、日勝峠と狩勝峠經由に快を分かち、一路帯広空港をめざした。

快晴に恵まれ、それぞれ二五〇キロ、二八キロのコースをとばして十勝平野に入り、帯広市内寸前で落ち合う。午前十時すぎ、五時間余りのレース？

の後、帯広空港に到着。東京から僅か一時間余で来道の深田氏とにこり握手を交わした。

市内で腹ごしらえをすませ、午後一時すぎ、帯広湖畔をたどって十勝三股の奥丹州御殿、飲湯跡まで九十数キロ、今宵のBCめざし再び車を走らせる。

帯広湖畔のダムサイト（一八七〇メートル）に見えるウベサンケ（一八七〇メートル）に、飲湯、深田氏とはおなじみの帯広エーデルワイスクラブ員四名の先行パーティーが待ち受ける御殿飯湯跡に着いたのは午後五時ころだった。

振り仰ぐ石狩岳は山ヒダに残雪をまとい、遠来の客を歓迎してくれた。テント三張に聴勢九名、やがて夜食の準備が整うと、まず深田氏を驚かせたのは、たき火を囲んで道産子自慢の若鶏の網焼きと石狩川を遡った見事な毛ガニのムシリ食。十勝名産の赤ワインで乾杯するや、石狩岳登頂の前祝いに、エゾの山男と紅一点の歌声が谷間に流れ、生ビールとワイスキーの宴にアイス直伝。高沢さんの無形文化財「フンボーエ」（鯨まつり）の唄もび出して、寧靜まったカラスを驚かせた。

二十日、夏至の朝は早々と明け、午前三時すぎ、ウグイスの声に祝福されて朝食もそこそこ出発、石狩岳をめざす。林道の切れたところからヤブこぎ、河原に出てほったしたのも束の間、新道シュナイダーコースの難所？「グマ転がし」の急坂を汗だくで登る。BCより約二時間ほどで出尾根の稜線に出、ツツジの花に見えながら、しばらく登って振り返ると、思いがけず彼方にニベソツ（二〇一三メートル）の雄姿が大きく誇らしげに見えた。高度を稼ぎようやく石狩と音更との稜線上の分岐に躍り出て行動食をとる。

キバナシタナゲの群落の中を音更岳へ歩み、頂上でウグイスキーで乾杯、前方は大雪渓をまよった大雪山連峰、

振り返ればニベソツの肩越しにウベサンケさらに左手に帯広湖が光る。東京を發った翌日、北海道の一番深い石狩山系の頂上立って大雪の山なみを見送るか深田氏は、とても楽しそうだった。

このあと休憩地点にもどり、今度はめざす石狩岳へ。頂上で握手を交わしたのとは後一時間。雲が出てきて、天候が崩れかける。ヒマラヤのスケッチ旅行から土産に持ち帰った坂本直行画伯の高山植物の種子を頂上に植えると、長居は無用と下りはBCめざして一目散。登りにあえいだ急坂で深田氏がもんどり打って一回転。続いたわれら顔見合わせて「さすがクマ転がしとはネー」。BC帰着午後五時半、まさに十三時間のアルバイトだった。

ところがこれからが大変である。テント撤収後、今宵の宿、山田温泉までは四十数キロ、帯広に居るエーデルワイスの諸君に名残りの惜しむものもそこそこの、昨日たどった帯広湖畔を逆戻り、大きく山越えして深淵な然別湖の奥、山田温泉に着いたのはさすが、夏至の一日もとつぷり暮れた夜八時すぎだった。

ここでエーデルワイスの別パーティー男女三人の諸君の歓迎を受け、岩風呂でひと汗流したあと、化粧柳にツバメの行き交う渡り廊下のかたわらで、ランブをかせしてジンギスカン鍋を囲んで交歓。夜を徹して帯広へ帰る三名を送って就寝は十二時近く正に「一番長い日」だった。

第二四五回小集會報告

日時 九月十八日（水）六時半—九時
場所 本会ルーム
今回は今年五月の日印合同婦人登山隊の報告会をおこないました。この登山隊は、本会の婦人部会員四名と印度

側六名とのジョイント・エクスペディションで、五月十三日、チャンパ・ヒマラヤのカイラシュ峰（五五五六米）に初登頂したものです。当日は滞印中の須田紀子隊員を除き、宮崎英子、折井正子、三島蓉子の三隊員から、印度式山登りのお話を聞き、スライドを見て楽しい一時を過ごしました。今回は五十名を越す出席者があり、ルームが満員となる盛況でした。

第二四六回小集會お知らせ

第二四六回小集會は十月十六日午後六時半から本会ルームで、会員鳥居鉄也氏の「南極内陸旅行について」と題する講演を行ないます。

ソ連情報 ウシバにグルジアのア

ルビニスト四十五名が一度に登頂した。

八月十五日付「プラウダ」によればトビリシ及びその近郊の町の大学生、若い労働者よりなる四十五名のグルジアのアルビニストたちは、レーニン・コムソモール五十周年を記念してカフカズの峻峰ウシバに登攀を敢行した。スポーツ・マスター、ミハイル・ヘルギアニを隊長とする登山隊は八月十五日にその頂上に立った。（田村俊介）

会務報告

九月定例理事評議員会

日時 昭和四十三年九月五日午後六時四十五分
場所 本会会議室
出席者 三田会長、吉沢、深田副会長（理事）山崎、丹部、大塚、宮下、広谷、川森、長尾、小方、中島、野上、小倉（評議員）佐藤、石原、沼倉

茗溪堂の山の本

東京都千代田区神田駿河台二—電話二九一—九四四〇 振替口座東京二四七三三

遠い山 近い山

山に登り続けている著者が、郊外閑話のような気易さで山仲間語りかけるひっそりとした山や峠の紀行集。望月達夫著 定価 九六〇円

屋久島

九州の最高峰をもつ屋久島の自然と民俗のすべて。付録に三色刷詳細地図があり、観光や登山案内書に最適。赤星昌編 定価 三八〇円

山岳'61年/'62年

日本山岳会の機関誌で、毎年海外遠征の報告のほか、高い水準を示す山岳関係の記事がいつぱいの山岳年鑑。日本山岳会編 定価 '61年、一八〇〇円 '62年、二〇〇〇円

登山ゴジューン・カン

明治大学ヒマラヤ登山隊の記録。八人の男たちが、未踏峰ゴジューン・カンの頂に立つまでの異色の登頂記。高橋進編 定価 九〇〇円

山日記一九六八年版

三十八年の歴史ある編集。全国山岳の最新情報や役に立つ記事がいつぱいの山行必携の書。職場、学校にもどうぞ。日本山岳会編 定価 四〇〇円

山で唄う歌第一集/第二集

第一集は比較的ポピュラーなものの61曲、第二集は日本の歌も選んでみずかしい原語の曲には訳詞をつけ68曲を集録。戸野昭・朝倉宏編 定価 第一集、二四〇円 第二集、二八〇円

森林・草原・氷河

近代登山家の第一人者である著者のつづる三十余年にわたる探検と登山の紀行。ほかに格調高いエッセイを収載。加藤泰安著 定価 一、五〇〇円

雪原の足あと

三十年間、異色画家が好きな山に登るかたわら、北海道の四季と自然を楽しむ文章と豊富な絵でつづった画文集。坂本直行画文集 定価 二、八〇〇円

アンナプルナ日記

一九五三年に京都大学の人数による貴重なヒマラヤ遠征記録。京都大学初のヒマラヤ報告。京都大学山岳会 定価 六九〇円

南極新聞

第一次南極観測隊の記録。昭和基地にできた南極新聞社発行の月刊新聞の縮刷版。南極研究会編 定価 六〇〇円

●新刊 キンヤンキツシュ一九六五年

東京大学カラコルム遠征隊編「キンヤンキツシュ」にいどんな主内容の報告書。ほかに学術調査記事も収載。第一章、序文・大河内一男／第二章、調査／第三章、計画と反省／第四章、日誌。B5変形判／本文三〇頁／写真六〇頁／上製箱入 定価三〇〇〇円

津田、中田（委任）藤井、飯野、竹田、芳野各理事松方、渡辺、島田、加藤、小原、望月、伊藤、三井、高山、各議員。堀田、牧野監事、

（議題）

一、エベレストの件 （会長）

九月四日開かれたエベレスト委員会の模様が会長から報告された。計画実行と隊長松方三郎氏の件は従来通りで、最近の情報からネパール政府の開禁も間近のことから、委員会も準備を進める態勢であるということであった。またこの件につき各理事から種々の意見の交換があった。

二、神河内山荘の件 （大塚）

担当の藤井、飯野両理事欠席のため代って報告があった。それによると、新築計画を進めるには是非とも新規借用地にすべく、その方向で準備をすすめているということであった。

三、年次晩餐会の件 （大塚）

常務理事会の原案が次の通り示された。

日時、十二月六日（金）午後五時半開催、六時半晩餐会

場所・松屋サロン

会費・二、〇〇〇円

種々検討の結果、グリーン会館の提案もあったので、その下見も含めて常務理事会に一任することになった。

四、遭難対策シンポジウムの件（宮下）

準備状況の説明が次の通りであった。期日十一月九日または十六日（土）十二時半から十六時四十分

場所・池袋西武デパート、フアウンテンホール

形式・講演とシンポジウム

対象・学生部、大学山岳部

内容・講演者氏名（予定）横有恒、桑原武夫、ティーンメン、加藤泰夫、辰沼広吉、大塚博美、宮下秀樹、浜野吉生氏など。

後援・文部省・毎日新聞社など予定

五、報告事項

①シエラクラブ、キンボール氏来日

レセプションを次の通り行なう。

九月二十四日（火）夜

国際文化会館にてビールパーティ

会費は一、〇〇〇円位

自然保護協会、厚生省関係者などにも案内を出すことにした。

②名簿

ガラ刷りの校正を各理事分担し、十一日までに事務局に送ってもらうことにした。完成は十月中旬頃の手定。

③図書交換即売会の件 （野上）

次の通り行なうことになった。

十月二十六日午後三時から七時

場所・本会ルーム

④この一本展の件 （野上）

本年度年次晩餐会の「この一本展」は特にテーマなしで各自持ち寄ることになった。

⑤夏山診療所の件 （長尾）

次の通り報告があった。

本年度は五十万円の助成金（従来三十五万円）になった。これには国立公園協会と委託契約を交す必要があり、助成金は自転車振興会から出ることになった。加盟校十三校を集め相談をしたい。

⑥山岳の件 （中島）

山岳の索引は本年度に作成の予定

⑦六階に引越する件はすでに向井組

本社の移転が終了したので中止となった旨報告があった。

また現在窓枠取替作業で種々不都合が生じたため店子会議が持たれ、本会も事務局から出席した。

⑧山形商業山岳部顧問長沼先生、刑事事件として、八月十二日山形地検から起訴された。このことについて後藤山形支部長から本会宛協力依頼

のあった旨報告があり、起訴理由の説明があった。

⑨富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑩富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑪富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑫富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑬富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑭富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑮富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑯富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑰富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑱富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑲富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

⑳富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

㉑富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

㉒富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

㉓富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

㉔富山支部小屋開所式を十月十日行なう。

（中田）

真珠書院寄贈
(1)大護八郎著『修那羅の石仏』昭・43
(2)保善社寄贈
(3)布施正直著『尾瀬の四季』（カラーブック5）昭・43・6
(4)白水社寄贈
(5)ポール・ベッシーエル著・青木正樹訳『アルピニズム』昭・43・8
(6)文研出版寄贈
(7)展野嘉代子著『ケニヤで考えたこと』昭・43・6
(8)暮しの手帖社寄贈
(9)津田正夫著『テロル案内』昭・43・7
(10)北陸新聞寄贈
(11)山西潔・坪川忠・田中孝治共著『野山の薬草—その薬用メモ—』昭・43・6
(12)実業—日本社寄贈
(13)ブルグアイドブックス編集部編『東京近郊の山』昭・43・8
(14)あかね書房寄贈
(15)第2次KCC編『登攀用具と装備』昭・43・8
(16)定期刊行物受入報告
(17)（昭・43・8）

（部報・会報類）

1『あしなが』一〇八輯

2札幌山岳倶楽部『部報』No. 80

3『兵庫山岳』No. 15

4『山と雪』No. 124

5名古屋山岳会月報 No. 10-12

（山岳雑誌）

1『アルプ』No. 126 (43・8)

2『岳人』No. 253 (43・8)

3『ハイカー』No. 155 (43・8)

4『山と溪谷』No. 360 (43・8)

5バックナンバー欠号の寄贈

山と溪谷社寄贈

1『山と溪谷』No. 354, 356-358

2『山と溪谷』No. 354, 356-358

3『山と溪谷』No. 354, 356-358

4『山と溪谷』No. 354, 356-358

5『山と溪谷』No. 354, 356-358

6『山と溪谷』No. 354, 356-358

7『山と溪谷』No. 354, 356-358

8『山と溪谷』No. 354, 356-358

9『山と溪谷』No. 354, 356-358

10『山と溪谷』No. 354, 356-358

11『山と溪谷』No. 354, 356-358

12『山と溪谷』No. 354, 356-358

13『山と溪谷』No. 354, 356-358

14『山と溪谷』No. 354, 356-358

15『山と溪谷』No. 354, 356-358

16『山と溪谷』No. 354, 356-358

17『山と溪谷』No. 354, 356-358

18『山と溪谷』No. 354, 356-358

19『山と溪谷』No. 354, 356-358

20『山と溪谷』No. 354, 356-358

July, 1968
2 The American Alpine Journal, Vol. 16, No. 1, 1968
3 Der Bergsteiger, Jahrgang 35, Heft 7, Juli 1968
4 Mountaineering, Vol. V, No. 3 Spring 1967
5 Rivista Mensile, Anno 89, No. 4-5, Aprile-Maggio 1968
6 Sierra Club Bulletin, Vol. 53, No. 6-7, June-July 1968
7 Tilt Falls 1967.
8 The Alpine Journal, Vol. LX XIII, No. 316, May 1968
9 Jahr buch des Deutschen Alpenvereins 1967.
Prof. Dr. Dyhrenfurth 寄贈
Alpinismus, Jahrgang 5.3, März 1967
Himalayan Chronicle, 1966
地山の寄贈
富山県寄贈
(1)北アルプス登山案内図1: 25,000
(2)北アルプス登山案内図2: 25,000
(3)南アルプス1: 75,000
(4)合本の報告
今年度第一回目の合本ができあがりました。中林製本手帳株式会社に依頼した三十五冊がそれぞれ、次の通り報告いたします。

1966 No. 328-330

1967 No. 338-340

1967 No. 341-343

1967 No. 344-346

1967 No. 347-350

1967 No. 351-356

1968 No. 116-122

1968 No. 123-128

1961 No. 133-156

1965 No. 157-160

1965 No. 208-211

1965 No. 212-215

1967 No. 230-232

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

1967 No. 233-235

No. 236~239
No. 240~243

せりり 自第一巻至第三巻

あしなか 八一輯~九八輯

自然保護 No. 1~50

山岳展望 No. 1~10

針葉樹 No. 3~4

登高行 No. 15~16

踏跡 第一~三誌

関西学生山岳連盟報告 No. 1~4

ウ・デン・カンチ・1936・um Den

Kantsch 1933

Alpinismus 1967

La Montagne et Alpinisme

1965~1966

Mitteilungen des Deutschen Al-

penvereins 1965~1966

Der Bergsteiger 1967 1~6, 1967

7~12

The Alpine Journal Vol. 37 1925

Vol. 38 1926

Vol. 39 1927

Vol. 42 1930

Vol. 43 1931

総申込口数 七四六二口

(募金目標に対し九三・二%)

氏名	会員番号	応募額	現住地
大間知邦太郎	一三八二	二	富山
沢井 貞夫	三六七四	三	東京
長尾登之助	三七六五	三	埼玉
長崎 幸雄	五〇五九	一	石川
村井 葵	六二八五	一	千葉

本会関係その他

日本山岳会越後支部 追〇・四

計二・五

ルーム日誌 (43・8)

9日(金) 会報委員会

14日(水) 日印合同婦人登山隊打合せ

23日(金) 常務理事会

八月中来室者一五一名

あとがき 吉沢、小方両氏は九月下旬出発されました。この号からいよいよ小生一人。よろしく。(山崎)

昭和四十三年度

「山」編集委員

編集代表 山崎 安治
委員 吉沢 一郎
坂本 矩一
松田 雄一
倉知 敬
小方 全弘

担当理事

昭和四十三年十月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

頒価五十円 (23) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

代表者変更

一一一九 新潟大学山の会代表小林兼

一郎

退会者

四二二〇 神奈川県工業試験所スキー

アルパインクラブ代表者泉彦太郎

(43・7)

五九八一 蔵野勝美(43・7)

六〇五一 吉田 茂(43・7)

ルーム基金入金報告

事務局

八月一日~八月三十一日間のルーム基金

金応募は左記の通りです。

申込件数 六件

申込口数 一口・四口 (追加一件を含む)

総申込件数 一、三七〇件